

18世紀後半のワラキア・モルドヴァ両公国をめぐる国際関係の変容  
——オスマン帝国の中央=周辺関係に注目して——

黛 秋 津

0. はじめに

- ・報告者の問題関心——近代以降西欧を中心として地球を覆う一つのシステムが形成される中、他の「文化世界」「文明圏」としての帝国(「世界」帝国)はいかなる過程を経てそのシステムに加わり、あるいは加えられていったのか?(近代国際システム形成過程における帝国)またその過程において、帝国の周縁ではどのような変化が生じ、また帝国の周縁はどのような役割を果たしたのか?(近代における帝国秩序の再編成)
- ・本報告のねらい——上の問題関心に基づき、その一つの例として、イスラーム的「世界」帝国であるオスマン帝国が近代国際システムへ参加して行く18世紀後半の時期の、オスマン帝国の附庸国であったワラキアとモルドヴァの二つの公国に焦点を当てる。特に①西欧諸国・ロシア・オスマン帝国間の力関係の変化と、それに対応して生じたオスマン・両公国の宗主・附庸関係の変化、②オスマン帝国とロシア帝国という二つの巨大「世界」帝国の、西欧国際システムへの統合初期における、同地域が果たしたインターフェイスとしての役割、に注目

1. オスマン帝国の周縁としてのワラキア・モルドヴァ両公国

- ・オスマン帝国の附庸国——ワラキア・モルドヴァ、トランシルヴァニア、ラグーザ、クリム・ハーン国、ヒジャーズ、西グルジアなど——それぞれに中央との権利・義務諸関係が異なり、中心からの支配の強弱が異なる。Ex. ラグーザ、トランシルヴァニアは弱。ワラキア・モルドヴァは強
- ・オスマン帝国にとってのバルカン——中核と周縁を併せ持つ地域。中核としてのルメリと周縁としてのワラキア・モルドヴァ
- ・ワラキアは15世紀半ば、モルドヴァは16世紀前半にオスマン帝国に従属—イスタンブルへの食糧供給基地としての位置づけ
- ・他のバルカン地域と異なり、何故オスマン帝国は両公国を併合しなかったのか?——ルーマニアでの論争→取引費用の問題?
- ・17世紀末の宗主・附庸関係の動揺と18世紀初頭のファナリオット制度導入。すなわち、現地選出の公を中央政府が任命することを止め、中央政府が選出した、主にギリシア系の

正教徒有力者階層の人物をイスタンブルから派遣→両公国をめぐる国際関係の変化に対応する中央による中間支配の強化

- ・ロシア側にとっての両公国：17世紀半ば—ウクライナの背後にあるモルドヴァの戦略的重要性。17世紀末—ピョートルによるアゾフ進出により、ロシアのバルカン進出が現実味→1710—11 プルーツ戦争において、モルドヴァ公とロシアの密約。正教徒の保護者としてのロシアのアピール。しかし正教徒住民の積極的な協力は得られず、戦争に敗北。18世紀前半—両公国への進出を目標としつつも、具体的な動きはほとんどなし

## 2. 西欧・ロシア・オスマン帝国関係の変容の出発点としてのキュチュク・カイナルジャ条約

- ・17世紀末のオスマン帝国をめぐる国際関係の変容：1699年のカルロヴィッツ条約によりオスマンの優位からロシア・ハプスブルク・オスマン三帝国間の勢力均衡へ——しかしその後もワラキアとモルドヴァはオスマン帝国内の問題として外交問題とはならず
- ・1768年ロシア・オスマン戦争——ロシアの軍事的圧勝。両公国でも支配者・住民ともにロシアに期待し、両公国はロシア軍の占領下に→ハプスブルク帝国とプロイセンが交渉の仲介者として介入→ロシアは両公国返還を受け入れ
- ・ロシア・オスマン間の和平交渉中のワラキア・モルドヴァ問題——ラグーザ型宗主・付庸関係か（ロシアの提示した和平草案）、現状維持か（オスマン側の主張）
- ・1774年7月キュチュク・カイナルジャ条約締結——黒海周辺地域でロシアはいくつかの権利を獲得し、両公国に関しては（条約第16条）、「ラグーザ」の語は外されるも、ロシアは両公国内政への「発言権」を獲得。同時にロシアの傀儡が終身モルドヴァ公位に——オスマン帝国の中央＝周辺関係への楔→以降、西欧・ロシア・オスマン関係は静から動へ

## 3. 1774年後の国際関係の変容とオスマン・両公国関係

- ・オスマン・両公国関係へのロシアの介入の開始：公の頻繁な交替の阻止、両公国からイスタンブルへ支払われる諸税の金額の明示などを要求——オスマンの中央＝周辺関係への挑戦→1784年の誓約にて実現。しかし実際には守られず
- ・1780年頃からは、ドナウ・黒海進出を目指すハプスブルク帝国もロシアに加わる。例えば、両公国における領事館設置問題
- ・フランス革命後の1790年代前半に新たな展開。共和国フランスのバルカン・黒海進出。イギリスも関心→両公国はイギリス・フランス・ロシア・オスマン帝国間の問題へ。特にフランスの影響力の増大

## 4. 1802年の勅令の意義

- ・1798年フランスのエジプト侵攻による、オスマン外交の大きな方針転換→ロシア・オスマン同盟の成立

- ・一方で、オスマン帝国内ではバルカンの混乱と無政府状態→バルカンの正教徒たちは、混乱の解消と治安維持のためロシアの出兵を期待→ロシアはオスマン政府に対し、両公国の地位待遇改善のための圧力
- ・1802年9月オスマン政府から両公国へ勅令発布。この勅令は、オスマン・両公国関係を規定する、事実上のロシア・オスマン間の外交条約（ロシアは「批准」を行う）→1802年の勅令は、1829年のアドリアノーブル条約まで、オスマン・両公国関係を規定する法となる
- ・その後この勅令は、その内容に不満なオスマン政府とロシアとの同盟解消を狙うフランスの標的に→1806年ロシア・オスマン戦争へ

## 5. まとめと展望

- ・18世紀半ばまで、オスマン・両公国間の中央＝周辺関係は、17世紀末に動揺しつつも維持されていたが、1774年を境に変容を余儀なくされた
- ・住民のほとんどが正教徒であるというワラキア・モルドヴァの有する条件が、特に18世紀以降、オスマン帝国からの遠心力、ロシアへの引力として働く→しかしロシアの吸引力は、そのままロシア帝国の拡大には直接つながらず、同時に生ずる西欧諸国の関与によって複雑で多様な諸関係が構築されてゆく→西欧・ロシア・オスマン帝国間の諸関係の緊密化→結果として西欧国際システムの拡大へ、という流れ
- ・近代国際システム、さらに現代グローバルシステム形成におけるロシア帝国の役割——ロシアの拡大とそれと同時に生じる西欧の関与（主にイギリス帝国）による他の「世界」の統合という流れは、イラン、アフガニスタン、東アジア、など他の地域ではどうなのか？ロシアの役割の大きさは、地理的な近さなどの特別な条件を備えたバルカンの特殊事情か、あるいは程度の差はあれ、近代のユーラシアにかなり広く認められるものなのか→西欧とロシアは車の両輪？

## 主な参考文献

- ・Akiba, Jun, 'Preliminaries to a Comparative History of the Russian and Ottoman Empires: Perspectives from Ottoman Studies,' in Matsuzato, Kimitaka ed., *Imperiology: From Empirical Knowledge to Discussing the Russian Empire*, Sapporo: Slavic Research Center, 2007, pp. 33-47.
- ・Anderson, M. S., *The Eastern Question 1774-1923: A Study in International Relations*, London: Macmillan, 1966.
- ・Bull, Hedley & Watson, Adam eds., *The Expansion of International Society*, Oxford: Oxford University Press, 1984.
- ・Barkey, Karen, *Empire of Difference: the Ottomans in Comparative Perspective*, New York: Cambridge University Press, 2008.

- Karpat, Kemal H., and Zens, Robert W. eds., *Ottoman Borderlands: Issues, Personalities and Political Changes*, The University of Wisconsin Press: Madison, 2003.
- Köse, Osman, *1774 Küçük Kaynarca Andlaşması (Oluşumu-Tahlili-Tatbiki)*, Ankara, 2006.
- LeDonne, John P., *The Russian Empire and the World, 1700-1917: The Geopolitics of Expansion and Containment*, Oxford University Press, 1997.
- Lieven, Dominic, *Empire: the Russian Empire and Its Rivals*, London, 2000. (ドミニク・リーヴェン著、松井秀和訳、『帝国の興亡』上下巻、日本経済新聞社、2002年)
- Mayuzumi, Akitsu, "Issues pertaining to Wallachian and Moldavian *voyvodas* and their effect on Russo-Ottoman relations (1774-1806)," *Japanese Slavic and East European Studies*, vol.27, 2007.3, pp.1-31.
- Maxim, Mihai, *L'empire Ottoman au nord du Danube et l'autonomie des Principautés Roumaines au XVIe siècle. Études et documents*, Istanbul: Isis, 1999.
- Panaite, Viorel, *The Ottoman Law of War and Peace: The Ottoman Empire and Tribute Payers*, Boulder: East European Monographs, 2000.
- Roider, Jr., Karl A., *Austria's Eastern Question 1700-1791*, Princeton: Princeton University Press, 1982.
- Sugar, Peter F., *Southeastern Europe under Ottoman Rule, 1354-1804*, Seattle & London: University of Washington Press, 1977.
- Yurdusev, A. Nuri ed., *Ottoman Diplomacy: Conventional or Unconventional?*, New York: Palgrave Macmillan, 2004.
- *Век Екатерины II: Россия и Балканы*, Москва, 1998.
- Дружинина, Е. И., *Кючук-кайнарджийский мир 1774 года (его подготовка и заключение)*, Москва, 1955.
- *Очерки внешнеполитической истории молдавского княжества (последняя треть XIV – начало XIX в.)*, Кишинев, 1987.
- 鈴木董『イスラムの家からバベルの塔へ——オスマン帝国における諸民族の統合と共存』リポート、1993年。
- 鈴木董『オスマン帝国の解体—文化世界と国民国家』ちくま新書、2000年。
- 黛秋津「ロシア・オスマン関係の中のワラキア・モルドヴァ公問題——18世紀後半から19世紀初頭まで——」『史学雑誌』第133編 第3号、2004年、pp. 1-33.
- 黛秋津「近代国際システム形成過程におけるロシアとオスマン帝国—ワラキア・モルドヴァ問題を中心に(1768—1806)」(学位論文 博士 2007年9月提出)
- 黛秋津「ロシアのバルカン進出とキュチュク・カイナルジャ条約(1774年)——その意義についての再検討」『ロシア・東欧研究』第37号(2008年度)、2009年、pp. 94-105.

報告の後の議論では、まず参加者から、付庸国を管轄する官庁の有無など、オスマン帝国の周辺支配に関するいくつかの事実確認が行われたのち、ロシアと西欧諸国のオスマン帝国への進出と、それに伴うオスマン帝国の秩序観の変化について質問があり、条約締結や交渉の進め方、そして西欧・ロシア側君主の称号などに関して、17世紀末以降18世紀にかけてオスマン側が修正を迫られ、その様式が変化したことが報告者より述べられた。それから報告の内容に関して参加者からいくつかのコメントがあり、例えば、東アジアなどの例では、西欧諸国の進出によって帝国の中央＝周辺関係の変容が直ちに生じるわけではないことから、この18世紀後半以降のオスマン・両公国関係の変容も、より長いタイムスパンの中で見る必要があるのではないか、といった指摘がなされた。また近代におけるロシアの役割に関しては、イスラーム世界や東アジア世界に対する陸上型帝国としてのインパクトの強さが、イギリスやフランスなどの海洋型帝国のそれよりも勝っており、それ故ロシアはユーラシアでの近代国際システム形成に大きな役割を果たしたのではないか、という意見が出された。その他、ロシアが、宗主側主導の曖昧なオスマン・両公国関係に、明確な条約関係という法的な枠組みをはめようとする、一見近代的に思われる行為の意味や、オスマン・ワラキア関係とオスマン・モルドヴァ関係を同列に扱うことの妥当性などが議論の対象となった。

(文責：黛)